縄文社会と弥生社会

「弥生文化」に対する認識は、「縄文文化とはどのように異なっていたか」を把握する観点から出発した。最初は①縄文土器と違う赤褐色の壷を指標として弥生式土器が認識され、やがて②この文化期には石器を伴うことが判明し石器時代に属するものとされた。これが弥生文化についての明治時代の認識であった。ところが石器においても③磨製石剣や石庖丁、抉入片刃石斧など縄文時代とは異なって大陸と共通する種類が見られ、さらに④銅剣や銅矛などの青銅器も存在していたことが知られるようになった。また実際に青銅器遺物に石器が伴うことから大正時代には弥生文化は金石併用期であろうとの見解にまで達した。昭和に入り弥生式土器を出す遺跡から米が検出されることから⑤農耕文化の所産であることが明確にされ、また墓制として北部九州一帯には甕棺という特殊な埋葬方法が営まれていたことが知られていたが、弥生時代の水田址の実態や⑥鉄製品の具体的内容については戦後の調査研究を待たなければならなかった。

このようにして1960年代までの弥生時代・弥生文化に対する一般的認識は、水田耕作をその生成基盤として新来の磨製石器や鉄製品、木製農具を備え、青銅製武器や祭器で彩られた階層制を有する社会の所産であろうとの見解に達していたのである。

60年代以後大規模開発にともなう発掘調査の進展にあわせての広域的な調査が行われるようになると、弥生文化の地域的なヴァリエーションが顕著にされただけでなく、文化内容に関しても従来の見解を一新するほどの豊富な情報がもたらされ、その結果弥生文化と縄文文化の境界が不鮮明になってきた。縄文時代後期ころから一部に畑作栽培が行われていたとの説もかなりの蓋然性をもって語られていたが、「縄文土器」を使用する人々が水田を経営していたことが実証され、縄文晩期には鉄製品の存在も説かれ始めている。原産地の限られる黒曜石や糸魚川産の翡翠などの分布を通して、縄文時代の流通ネット・ワークが想定されていたが、最近ではオオツタノハやイモガイといった南海産貝製品の広範な拡がりから、その規模が列島全体にまで及んでいたことが知られるようになり、さらに漁撈技術の共通性から朝鮮半島や樺太を経由しての密接な大陸との交流が認められるにいたっている。こうした現象が顕著になる縄文時代後期以降から弥生時代にかけての文化状況は、縄文文化と弥生文化の違いをきわめてファジーなものにしているのである。

こうした初期農耕文化の成立期における混濁した様相は、農耕文化が「波及して」形成されたヨーロッパ地域でのありかたと共通している点が興味深い。ヨーロッパでは中石器時代の後

半期には「人間による自然環境の操作」の結果として、ある種の穀物栽培の痕跡や動物の飼育などが存在していたことが自然科学の手法を用いての研究により主張されていたが、また逆に新石器時代の具体的な出土遺物の分析を通して、その全期間野生植物への依存度が実際の生活上では遥かに重要であったことが示され、中石器時代とは経済形態のうえではさほど顕著な差異が見いだせないことが判明してきたのである（Moffet, L., Robinson, M. and Straiker, V. The Beginnings of Agriculture. BAR International Series 496. Oxford, 1989.）。その結果中石器時代と新石器時代を弁別する重要な点は、システム化した社会であるか否かを検討する必要があるこが強調されるにいたっている。

その意味からすれば縄文時代の広域的な物資の交流も「象徴的遺物」のみであるのに対して、弥生時代には青銅器や貝製品などの「威信財」の他に、石斧や石庖丁、数々の鉄製品のような直接生産に係わる、生産地の限定された諸道具の分布に窺える組織化された物資流通のネットワーク・センターの存在が重要な地位を占めていたことが挙げられる。これらの物資が共同の墓域内にあっても特定の集団に偏在する在り方から、威信財を独占的に集中する集団の共同墓域からの逸脱へと急速に展開する背景には、弥生時代当初の段階から構造的に社会を編成するという構想があったのではないかとも想定されるのである。

言い換えると弥生時代になって社会的階層化が始まるのであり、新進化論的解釈では、縄文時代と弥生時代はバンド・レヴェルの社会と部族レヴェルの社会との差異に換言できる。

『縄文と弥生』第11回大学と科学公開シンポジューム。1977年９月